



自序

著者のような一臨床研究家のもとで、なぜこのような構造医学の概念が生まれたかという、それは古くから先人達が考えてきたと同様に生と死、あるいは生物と無生物とは生命科学の領域においていったいどのように理解すべきかといった命題にぶつかったことに始まるわけである。あるドキュメント映画で産卵のために自分の生まれた清流を力づよく昇って行くサケの群れが上流へ上流へと流れに逆らって、一時の休みもなくひれを動かし続けている場面が映し出された。それはまさに生きている活動の場であり、不断の動きがそこにあった。しばらくして場面は一転し産卵を終ったサケが力づきて流れに抵抗できず流されてゆく姿が現れ、その後全ての活動を停止した死の状態が現出されたが、その身は流れのままであった。この瞬間の著者は、はっとさせられてしまい「生命とは」の一つの解が得られた気がしたのである。それは、清流に抵抗して川を昇ろうとする不断の動きこそが生そのものあるいは生物活動の根幹であり、これとは対象的に流れに対して全く抵抗できないものが死または無生物状態を意味している様に思えたからだ。我々の人生においても、そこにはやはり水流と同じ様な色々な流れが存在し、この流れの中に身をおいて不断の活動によって流れに向かって進んで行く状態が生きていることなのであり、この活動を断つことがいわゆる死を意味すること、こう考えてみると生命の活動は流れに抵抗して行われているのであり、この活動は当然エネルギーの消費を伴うことになるのである。ここで抵抗するということはむしろ流れに順じているのであって、これが自然の生の概念のように思えてならない。逆に流れの向きに従うことは死または活動の一時的減衰であるところの病的な状態に喩えることができよう。

魚の形をとってみても流れに応ずる様に創造されているわけで、流れに応ずることが生物の生命活動そのものであることを証明しているような気がする。ここで植物について考えてみると種をまき水をやると芽を出し天に向かって茎を伸ばして成長してゆく、さらに、実験室の中でシャーレに種をまき、このシャーレを地面に直角に立てておいても茎は天に向かって伸びようとする。もちろんここで太陽の光の方向に葉を向ける様子が観察されるが、これは太陽の光の流れに向かうことでより生命活動を強めることができるからなのであって、この光もまた生命に必要なものに他ならない。ここで、この光をさえ切るために暗箱の中にシャーレを入れてみてもやはり芽をふき茎は天の方向つまり地面に鉛直に伸びてゆくのである。実はこれは、地球の重力の流れに向かって伸びるように活動しているのであって、先に述べた清流を昇るサケも水の流れが重力によることからやはり重力に応じていることになる。このことは何らかの形で生命と重力が深く結びついていることを示唆している。さらには、人類や他の動物達すべてがこの重力の流れに向かって応じた構造に成長していくことも事実であり、その構造も静止している

複写・再配布等

【構造医学の原理】(吉田勤持, エンタブラ)



場合には極めて不安定で不断の活動があってこそ安定した状態の維持ができるようになるのである。これは二足直立をとっても証明できよう。これに対し、石ころのような無生物は重力のもとですでに静的に安定した状態で地面にころがっており、ここには不断の活動は必要ないのである。この点が動的状態で初めて構造安定をはかる生物との間に一線をかくしたものといえよう。どうも、こう考えてみると生物は一生を通してこの重力の流れに応じて活動し続けているようである。そして人類の構造や機構からみればこの活動が全て停止した状態が死であるはずである。そこで、この様な考え方から生命科学である医学の分野に一つの基準の場（生物の重力に反応する場）を設け、この場の中でこれに応じているか否かをもって生理的か非生理的かを判定し、疾病の診断や臨床に応用を試みたのが構造医学の発想である。

ここで基礎医学と臨床医学とのつながりを眺めてみると、基礎とその応用といった深いかかわりがかなり薄れ、おたがいが独立し過ぎている様にもうけられる。もちろんこの様な対応も必要であろうが人体の総体としてのとらえ方では、これらが真に直結してこそ各種命題を克服できる素地が作られていくものと思われる。例えば基礎研究者に臨床の目がないばかりに生きている状態としての全体像が見えにくく、逆に臨床家に基礎領域の知識の理解が不十分なために疾病の全容がのみ込めないままに実地応用されている面が多々あり、この結果生体としての非常にデリケートな部分が相互に解き明かしきれないでいるのが現状ではないだろうか。この点、世にある幾人かの臨床家によって総体としての人体の原理が説かれこの応用によって生体としてのデリケートな部分が解決されつつあるのだが、これとても、原理の基軸を何に求めるかで散見のみられるところである。ある原理は、人間の意識から発する快、不快の感性を原理基盤とし、またあるものは、自然に体得されたときれる一種の反射行動を体語としてとらえこれによって生理的、非生理的を判断しようとする原理であった。このような原理は現代医学の実施の場にある残されたデリケートな問題をかなりカバーしてくれたし、この恩恵を受けた多くの人々がいることも事実である。種々の原理の起創者の目には、生体としての人間の姿がきつと見えていたのであろうが、この原理の伝承においては、いくつかの問題を残している様に思うのである。それは、快、不快の意識にせよ個体の知識や経験、思想や社会環境によって大きく左右され、真の快を何にもとめるかが全く不明瞭になる場合がある。例えば、姿勢一つ取ってみても、快、不快を表明する個体によってどの状態が生理的かを確立して示唆することはできない。さらに快を得るために、麻薬にたよる者達のあることから、身体を破壊に近づける場合のあることを知らなければならない。体語の概念もすばらしいものであるが後天性の反射機構、例えば、痛む足をかばって歩く場合、意識的にオーバーな動作をしていることがあり、この結果、本来のいたわりの領域を越えて逆に他の部位に過剰のストレスを加え、そこも損傷してしまうことがあることも事実である。

複写・再配布等

【構造医学の原理】(吉田勲持, エンタブリ)



このように快や不快が原始感覚による純粹な不随意感覚の領域であれば、これは一つの判断の基軸といえるだろうが、随意的要素が高まった場合、判断の目安とはなりづらく、このことから、この様な種々の原理は、優秀なものであるけれども基軸場のない相対感であることは否めない。このようなことから相対的な場での基軸要素があれば地上における一つの座標系での絶対的判断を下し易くなることは明白であろう。この意味からも正常重力場を基軸とした判断は、基軸が明確な点で再現性の高いものとなるはずである。本書によって医学者、臨床家、諸兄が生命科学の考え方や日常診療業務の場で考え方の補助及び転換による問題解決の一助となれば幸いである。この本の作成にあたり原稿の下書きを手伝ってくれた、本研究所西田、橋本、江崎、木村の各女子職員及び解説図を担当してくれた篠原清幸主任研究員、更には執筆の時間を与えてくれた浦瀬武臨床部長、そして原稿の推敲を手伝ってくれた妻の支援がなければ本書は到底生まれなかったのであり、これらの人々に感謝するものである。また、本書出版のためにイラストを担当してくれた浜崎、長鳴の両氏とエンタプライズ社の牧原氏に謝意を表すしだいである。

最後に人生についての太極の奥儀を伝授して戴いた、陳明熙老師と医学への門を開いて下さった米田一平博士に心より感謝致します。

複写・再配布等

【構造医学の原理】(吉田勤持,エンタプライズ1987)より